

授業科目名	日本建築史 2	担当教員名	澤田 享
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－美術理論・美術史		
履修区分	選択科目	授業形態	講義
配当年次・学期	2・3年次後期	単位数	2単位
授業の到達目標及びテーマ 全国的にも遺構数が多い。近世の建築を取り上げ、その様式、技術的な変遷を理解すると同時に、そこからその建物の建立年代を判定する能力を養う。 ・テーマ 日本古建築の様式、技術の変遷 日本古建築の建立時期の判定法			
授業の概要 比較的現遺構数が多い近世の建物を対象にして、近世建築について理解を深める。すなわち近世1：近世における建築界の動向とその建築。近世2：寺院・神社・霊廟建築。近世3：城郭建築（城郭建築については近世以前のものも触れる）。近世4：住宅建築を取り上げ、詳述する。近世建築については秋田県でも数多くの遺構があることから、それらについても併せて概説する。そして建築(美術・芸術を含む)の歴史を基礎知識として身につけると共に、一つの建築を前にしてその魅力を自分なりに感じとり、それ等を正しく伝えることが出来るよう講義を行う。			
授業計画 第1回 城郭建築の歴史と形態 第2回 城郭建築の技術的發展 第3回 近世の住宅(近世住宅の展開) 第4回 近世の住宅(桃山・江戸時代) 第5回 数寄屋建築(茶道の成立、書院の茶と草庵茶室) 第6回 数寄屋建築と数寄屋造の建築 第7回 霊廟 第8回 聖堂と学校建築 第9回 能舞台と劇場建築 第10回 農家建築 第11回 建築技術の発達と発展 第12回 近世の細部意匠と建立年代の判定法(臺股、木鼻の絵様線形を中心にして) 第13回 近世の細部意匠と建立年代の判定法(虹梁の絵様線形を中心にして) 第14回 建築構造(継手、仕口)について 第15回 まとめ (定期試験)			
履修上の注意 日本建築史1の単位を修得した上で履修することが望ましい。 必ずテキストを持参すること。			
テキスト 自作プリント(適宜)			
参考書・参考資料等			
学生に対する評価 小レポート20%、本レポート80%で評価し、100点満点で60点以上を単位認定とする。			

授業科目名	近代デザイン史特講	担当教員名	天貝 義教
授業科目区分	専門科目—専門共通科目—美術理論・美術史科目		
履修区分	選択科目	授業形態	講義
配当年次・学期	3・4年次後期	単位数	2単位
授業の到達目標及びテーマ この授業では、20世紀のモダン・アートとモダン・デザイン運動のモデルのひとつであるバウハウスのデザイン理念とその後の展開について学び、デザインの社会的価値についての理解を深めることを目的とする。			
授業の概要 バウハウスの理念について、第一次大戦後のドイツにおけるバウハウスの創立と閉鎖から、第二次大戦後のドイツとアメリカ合衆国における展開にいたるまで、具体的事例にもとづいて概説する。			
授業計画 第1回 使用するテキストについての説明 第2回 ヴァイマールにおけるバウハウス（1） 第3回 ヴァイマールにおけるバウハウス（2） 第4回 デッサウにおけるバウハウス（1） 第5回 デッサウにおけるバウハウス（2） 第6回 ハンネス・マイアーのバウハウス改革（1） 第7回 ハンネス・マイアーのバウハウス改革（2） 第8回 バウハウスの閉鎖とバウハウス人たちのアメリカ移住 第9回 モホイ・ナジのニュー・バウハウス 第10回 ドイツにおけるバウハウスの継承（1）ウルム造形大学 第11回 ドイツにおけるバウハウスの継承（2）具体芸術と外的環境形成の理論 第12回 ドイツにおけるバウハウスの継承（3）インダストリアル・デザインの概念 第13回 アルバースとブラック・マウンテンカレッジ（1） 第14回 アルバースとブラック・マウンテンカレッジ（2） 第15回 まとめ			
履修上の注意 配布テキストにもとづいて各回の講義内容について予習と復習を必ず行なうこと。			
テキスト 第1回の講義時に配布する。			
参考書・参考資料等 テキスト以外の参考資料・図書は適宜紹介する。			
学生に対する評価 授業への取組み(40%)、レポート(60%)を基本に総合的に評価し、60点以上を単位認定要件とする。			

授業科目名	デザイン史	担当教員名	天貝 義教
授業科目区分	専門科目—専門共通科目—美術理論・美術史科目		
履修区分	選択科目	授業形態	講義
配当年次・学期	1・2年次後期	単位数	2単位
授業の到達目標及びテーマ 産業革命以降のデザインの基礎的な概念を理解するとともに、その歴史を学ぶことによって、デザインについての基礎知識を身につけることを目指す。			
授業の概要 この授業では近代デザインの画期的な歴史的事項を概説するとともに、それらの背景にある主要なデザイン理論からデザインの基礎的な概念をとりあげて平易に解説する。			
授業計画 第1回 デザイン史を学ぶ意義について 第2回 産業革命における技術革新と造形意識の変化 第3回 芸術と産業 (1) : 万国博覧会と近代デザイン 第4回 芸術と産業 (2) : モリスとアーツ・アンド・クラフツ運動 第5回 芸術と産業 (3) : ウィーンにおける応用美術の振興 第6回 歴史主義からの脱却 : アール・ヌーヴォーとセセッション運動 第7回 様式主義から規格化へ : ドイツ工作連盟の設立とその理念 第8回 1920年代の動向 (1) : バウハウスの設立 第9回 1920年代の動向 (2) : バウハウスの発展 第10回 1920年代の動向 (3) : 近代デザインとモダン・アートの交流 第11回 アメリカにおける近代デザイン : ビジネスとしてのデザインの発展 第12回 第二次世界大戦前の日本 : 応用美術と意匠図案の国家的振興 第13回 第二次世界大戦後の日本 : 戦後の復興と近代デザイン理念の普及 第14回 ポスト・モダニズム以降 : デザイン概念の拡張とデザインのモラル 第15回 まとめ			
履修上の注意 教員免許状取得のための選択科目。各回の講義内容についてテキストにもとづいて予習と復習を必ず行なうこと。			
テキスト 阿部公正『世界デザイン史』			
参考書・参考資料等 出原栄一『日本のデザイン運動』			
学生に対する評価 授業への取組み(40%)、レポート(60%)を基本に総合的に評価し、60点以上を単位認定要件とする。			

授業科目名	西洋美術史	担当教員名	天貝 義教
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－美術理論・美術史科目		
履修区分	選択科目	授業形態	講義
配当年次・学期	1・2年次後期	単位数	2単位
授業の到達目標及びテーマ			
<p>古代ギリシアから二十世紀にいたるまでの西洋美術を特徴づけるもののひとつとしてパースペクティブ (Perspective) がある。パースペクティブの考え方はルネサンス期に確立し、二十世紀にいたって批判の対象となった。本講義では、ルネサンス、バロック、十九世紀、二十世紀におけるパースペクティブに関わる主要な議論と作品を取り上げ、西洋美術におけるパースペクティブの歴史的意義とともにその今日的な意義を探る。</p>			
授業の概要			
<p>本講義では、15世紀のL.B.アルベルティ、バロック期のアンドレア・ポツォ、19世紀初頭のJ.M.W.ターナー、20世紀前半のエル・リシツキーらによるPerspectiveに関する主要な議論を順次取り上げて、壁画・天井画・タブロー画・空間形成におけるPerspectiveの意義の変化を概説してゆく。</p>			
授業計画			
<p>第1回 はじめに Perspective とは何か。「視的ピラミッド」と「その切断」とは何か。 第2回 ルネサンス期における Perspective の成立 (1) L.B.アルベルティの『絵画論』以前 第3回 ルネサンス期における Perspective の成立 (2) L.B.アルベルティの『絵画論』 第4回 ルネサンス期における Perspective のイタリアにおける広がり 第5回 ルネサンス期における Perspective の探求 (1) 数学者ピエロ 第6回 ルネサンス期における Perspective の探求 (2) イタリアから北方へ 第7回 バロック期における Perspective の発展 (1) アンドレア・ポツォの試み 第8回 バロック期における Perspective の発展 (2) ローマからウィーンへ 第9回 バロック期における Perspective の発展 (3) 天井画の伝統 第10回 19世紀初頭における Perspective の展開 Perspective の理論家としてのターナー 第11回 20世紀前半における Perspective からの脱却 (1) リシツキーの空間デザイン 第12回 20世紀前半における Perspective からの脱却 (2) 未来派 第13回 20世紀前半における Perspective からの脱却 (3) キュビズム 第14回 20世紀前半における Perspective からの脱却 (4) アブストラクト・アート 第15回 まとめ</p>			
履修上の注意			
<p>この授業では「視的ピラミッド」など、L.B.アルベルティの絵画論、アンドレア・ポツォの教則本、J.M.W.ターナーの講義、エル・リシツキーの空間デザイン論などにみられるPerspectiveに関わる専門的な用語を使うので、これらの芸術家・デザイナーについて予習しておくことが必要である。</p>			
テキスト			
特に指定しない。			
参考書・参考資料等			
参考図書については授業中に適宜指示する。			
学生に対する評価			
<p>授業への取組み (40%) とレポート (60%) を基本に総合的に評価し、60点以上を単位認定要件とする。</p>			

授業科目名	文化人類学	担当教員名	石倉 敏明
授業科目区分	教養科目—歴史と文化		
履修区分	必修科目	授業形態	講義
配当年次・学期	2年次後期	単位数	2単位
授業の到達目標及びテーマ			
<p>人類学は地球上のさまざまな民族文化に学び、人類の心の普遍性を核とするユニークで多様な表現を理解する方法である。本講義では、諸々の文化の根源にある神話や祭り、経済活動や労働、エコロジーや時間／空間認識といった問題を通してこの方法を深め、日本列島の思想表現と世界の文化を統一的に理解するための考察力を養う。</p>			
授業の概要			
<p>本講義では、近年日本をはじめ各国で発達を遂げた「芸術人類学」の知見をもとに、異なる習慣や文化をもつ人びとの間にどのような共通性が存在するかという問題を、人類の心の普遍性という視点から探究する。ここでは特に「対称性」概念に着目し、贈与と交換、生産と消費、労働と遊びなど、異なる原理の組み合わせによって構築される「複論理 bi-logic」のダイナミズムについて学ぶ。</p>			
授業計画			
<p>第1回～3回 芸術人類学入門 旧石器時代の芸術と世界認識／脳科学に見る宗教と芸術の交錯／人間と動物の関係</p> <p>第4回～6回 神話と表現 循環する時空間の表現／音楽と神話／食べ物の起源／住まいと宇宙論／アフリカの映像人類学／エコロジーとしての神話学</p> <p>第7回～10回 贈与と共有 贈与と交換／エネルギーの存在論／芸術・労働・遊び／民藝と生活工芸</p> <p>第11回～13回 今日の神話学 観点主義と多自然論／制度外の芸術について／変換と反転／過去と未来をつなぐ営み</p> <p>第14回～15回 再獲得された世界 芸術制作と生活世界／芸術の神話体系／森はいかに思考するか？／「対称性」の再構築へ (定期試験)</p>			
履修上の注意			
<p>配布資料のほか、適宜映像資料を使用します。なお、新しい研究成果を授業に反映させるため、各回の内容や順番を変更することがあります。</p>			
テキスト			
<p>各回のテキストは適宜配布します。</p>			
参考書・参考資料等			
<p>石倉敏明・田附勝『野生めぐり』、中沢新一『カイエ・ソバージュ』（全五巻）、奥野他編『人と動物の人類学』、C.レヴィ＝ストロース『野生の思考』、パット・シップマン『アニマル・コネクション』、マルセル・モース『贈与論』など。</p>			
学生に対する評価			
<p>授業への取り組み 30% 課題の成果（試験・レポート） 70%</p>			

授業科目名	シルクロード図像学2	担当教員名	井上 豪
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－美術理論・美術史科目		
履修区分	選択科目	授業形態	講義
配当年次・学期	3・4年次後期	単位数	2単位
授業の到達目標及びテーマ			
<p>インドに発した仏教美術はシルクロードを東へ向かい、沙漠を越えて中国に伝えられた。隊商路として栄えた西域のオアシス地帯は、多彩な文化が常に混じり合う「民族の十字路」であった。</p> <p>本講義は、前期に開講する「シルクロード図像学1」のいわば後編として、楼蘭・亀茲などタリム盆地の仏教美術を中心に取り上げる。沙漠に没した「幻の王国」はいかなる文化を持ち、我々の東アジア世界にいかなる影響を与えてきたのか。多彩な民族文化の影響を考えながら、我々の身近に隠れた遠い異文化の影響や、忘れられた本来の意味など、多角的な視点で古代美術の世界について解説する。</p>			
授業の概要			
<p>遺跡全体から見た古代美術のあり方、壁画の各テーマから読み取れる美術の変容や文化的背景の検証、細部描写から再現される古代風俗の姿など、複数の視点から西域美術の図像を考察する。講義には配付資料とスライドを用い、幅広い視野で古代美術を捉えていきたい。</p>			
授業計画			
第1回	ガイダンス		
第2回	ミーラン遺跡と有翼天使図		
第3回	古代ホータンの信仰と図像		
第4回	キジル石窟の壁画		
第5回	図像の継承～型と粉本		
第6回	説話図の表現		
第7回	天象図と自然神		
第8回	瑞像図		
第9回	涅槃図とその周辺		
第10回	舍利容器と骨臓器		
第11回	獅子狩文		
第12回	花喰鳥と含珠鳥		
第13回	西域の服飾		
第14回	シルクロードの楽器		
第15回	まとめ		
(定期試験)			
履修上の注意			
<p>講義は一回完結の「読み切り」形式で進める。欠席しても次回の講義に支障は出ないが、欠席した回の内容は取り返しが利かないので注意されたい。</p>			
テキスト			
<p>内容に応じ毎回資料を作成、配付する。書籍等のテキストは使用しない。</p>			
参考書・参考資料等			
<p>必要に応じ講義の中で紹介する。</p>			
学生に対する評価			
<p>試験の成績に授業態度を加味し、授業への取り組み20%、試験成績80%として採点する。単位認定要件は100点満点で60点以上とする。</p>			